

猫 蓑 通 信

第 119号

令和五年
(2023年)
1月15日発行
(年4回発行)

秀樹前会長への謝辞とこれから

猫蓑会会長 鈴木千恵子



新しい年を迎えました。皆さま、お変わりなくお過ごしでしょうか。昨年を振り返ってみると、猫蓑会会員の訃報に接することが多かったのは悲しく淋しいことでした。青木秀樹会長の逝去を受けて、力不足ながらわたしが新会長を務めさせていただくことになった経緯は、会員の皆さまにお伝えした通りです。

秀樹さん(と、呼ばせていただきます)は、明雅先生から猫蓑会を託され、百数十名の猫蓑会員を長きに亘ってまとめられて来られました。大変なご努力と大らかな人柄の賜物であったと思います。前号にもあったように、口癖は「楽しくなければ連句じゃない、楽しいだけでも連句じゃない」でした。付けと転じを楽しむことだけでなく、連句の座自体を楽しむことを大切にされていました。その上で、よりよい作品を追

求されていました。また、今考えてみると、「楽しいだけでも」という言い方には、自分だけのことに捉われずに常に連衆への心配りを忘れないように、という教えも入っているように思います。

個人的な思い出になりますが、秀樹さんには連句界での活動をいろいろと広げていただきました。

明雅先生が亡くなられた後、連句協会にも入会してみればと誘ってくださったのは、秀樹さんでした。猫蓑作品集の編集をやってくれませんかと頼まれたのは、平成十八年のことでした。編集というのは校正のお手伝い程度のことと思ってお引き受けした仕事は、ところが「編集担当」でした。それから二十年近く続けたこととなります。国民文化祭の選者の話を初めていただいたときにも、遠くから応援してくれる人もいるのだからと後押しをしてくださりました。連句協会に話を戻すと、現在わたしは「連句協会会報」の募吟「新三つ物」を担当していますが、このコーナーをやってみればと言ってくれたのも秀樹さんでした。たくさんのアフター連句の場にも誘ってくださいました。若輩者のわたしをいつも引きたててくださったこと

●目次●

▼秀樹前会長への謝辞とこれから―鈴木千恵子

▼青木秀樹さん追悼―林 転石

▼酔山様ありがとうございました―佐々木有子

◎令和四年芭蕉忌・明雅忌作品・源心六巻

◎令和四年芭蕉忌正式俳諧

◎第十一回猫蓑会リポート作品・二十韻三巻

◎国民文化祭おきなわ2022連句大会

猫蓑会員受賞作品

(一般の部)

文部科学大臣賞

二十韻「大試験」 捌 杉本 聰

南城市長賞

二十韻「余生なら」 捌 橋本 枯野

南城市教育委員会教育長賞

二十韻「角を曲がれば」 捌 瀧村小奈生

一般社団法人日本連句協会会長奨励賞

二十韻「初蝶舞」 捌 根津忠史

(ジュニアの部)

文部科学大臣賞

三つ物「かげのしっぽ」 捌 鈴木千恵子

国民文化祭実行委員会会長賞

表合せ六句「はるのにじ」 捌 鈴木千恵子

沖縄県知事賞

表合せ六句「花びらは」 捌 宮川尚子

沖縄県議会議長賞

表合せ六句「合図なく」 捌 宮川尚子

南城市教育委員会教育長賞

三つ物「ゆうがくしき」 捌 鈴木千恵子

美ら海おきなわ文化祭2022南城市実行委員会会長賞

三つ物「うちのねこ」 捌 鈴木千恵子

一般社団法人日本連句協会会長賞

表合せ六句「鳥になる」 捌 平林香織

一般社団法人日本連句協会会長奨励賞

三つ物「シャーベット」 捌 植田陽子

▽子どもが連句に出会うとき 植田円水

夏 植田円水

▼事務局長だより 内田遊眠

12 11 10 10 10 10 9 9 9 9 9 8 8 8 8 7 6 4 3 2 1

に、深い感謝の念でいっぱいです。今でも、あの大きな目でしっかりとやりなさいよと励ましてくれるような気がします。

さて励まされて、これからどのような俳諧を目指すのか、どのような猫蓑会でありたいのかということ語らなくてはなりません。

連句（俳諧の連歌）の魅力は、世界でも稀な共同制作で生み出される文芸という点にあるでしょう。その場を推進していくのは、付けと転じです。付けということ考えるときに、虚心坦懐に前句と向き合っているだろうかということ、自他ともに考え直してみたいと思います。座を捌いて出された短冊に対して「これは前句にどう付いているのですか」と質問すると、「月の定座だったので」という答えが返ってくる場合があります。答えは、花の定座だったので、季題配置表で夏だったので、冬だったので、恋だったのなどで様々です。しかし季題表はあくまでも〈例〉です。季題表を根拠にするのではなく、前句に付けるときに、その付筋や付味よりも先に季や句材を考えてしまうということはあるがちなように思います。当然すぎることですけれども、前句に付けるという基本に今こそ立ち戻りたいと考えています。

転じの問題も同様です。打越をしっかりと読み込むことによって、前句に付いているけれども、鮮やかに転じているということが可能になるのではないのでしょうか。

「許六離別詞」の「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ」を再度掲げたいと思います。

ます。明雅先生は季題表を提唱されましたが、そこにあるからではなく、何故そのような配置が〈例〉としてありうるのか。式目にあるからではなく、何故そのようなことが式目として成立しているのか、そこで大切にされているものは何なのか。そのようなことを追求する一人ひとりの自覚的な取り組みに期待します。

明雅先生は、「宗砌の連歌十徳や斎藤徳元の俳諧五徳を受けて、講演会などで連句三徳を話されています。それは、一、健康で長生きできる。二、頭が惚けない。三、友達が多くできる、です。その中でも特に三に注目したいと思います。連句の連衆は「従兄弟よりも親しい」と言われています。親交を深める中で生れる文芸なので

青木秀樹さん追悼

林 転石



青木秀樹さんと初めて連句でお会いしたのは、深川芭蕉記念館が改装中で東郷神社の建物を借りて猫蓑月例会を行っていた二〇〇〇年一月だったと思う。以来、二十有余年のお付き合いとなった。

秀樹さんにはいろいろご迷惑を掛け、お世話にもなった。猫蓑会の預金通帳を紛失して

すから、いつでも連衆が快く巻けるようにお互いに心掛けたいものです。訪れた方が、温かさを感じられるようなそんな猫蓑会でありたいです。もちろん、みなさんと一緒に健康で長生きをして、会を発展させていきたいとも考えています。

秀樹さんによる追悼文「明雅先生への謝辞」〔猫蓑通信〕第54号・平成16年1月発行の末尾には、「志を受けつぎ一層研鑽を積むことをお誓いする」とありました。その覚悟のほどが伝わってくる一節です。まだまだ覚悟が甘いかもしいわたくしですが、お二人の志を受けつぎ一層研鑽を積むことをお誓いして、この文の結びといたします。

しまい一緒に銀行に手続きに行ってもらったことなど、酔って頭部に怪我をしたため、土良会の捌きを当日急に代わってもらったことなど。この時はとんでもない面相になってしまつて秀樹さんにお会いしては大いに驚かれ、また大いに笑われたことなど椿事が数多い。

秀樹さんは「楽しくなければ連句ではない」ということを言っていたが、これは連句という別世界に身を置いて席を同じうした人間同士がその触合いを楽しむということかと解釈する。ある時に秀樹さんと同じ座になった。他愛のない四方山話をし、さほど出句もしないで終始したことがある。連衆としてはほめられたことではないがその時の愉快な気分が

思い出される。句を出すこと、句を取られることばかりが連句ではない、言葉の外にある^{あはた}鬨たる心裡を共有することが連句を巻くということかもしれない。

秀樹さんは猫蓑会会長とともに日本連句協会の会長をも兼務していた。協会は国民文化祭の共催者であり、毎年の国文祭を後押ししているが、猫蓑会と二〇一九年開催の新潟国文祭との関りは新潟大学牛木辰男さんと明雅先生との機縁によるものである。かつて明雅先生の薫陶を受け「明雅先生と雪国興行」「再び明雅先生と雪国興行」という二冊の冊子をまとめられた牛木さんが新潟の連句を育てる会の委員長となられるにおよび、秀樹さんはその経緯により新潟国文祭は是非に成功させなければならぬという思いを強くしたようである。そのご意向もあって連句協会は担当の吉田酔山さんを筆頭として、大いに新潟国文祭の支援に力を注いだ。

亡くなられた後で知ったことであるが、秀樹さんは武生の連句会の作品添削などの指導をしておられた。また、地元調布の図書館主催の連句入門の講座開設にも尽力されている。殊に猫蓑会会長就任前後の退会者の経緯にはいろいろご苦労があったことと推し量るものであるが、詳らかにはなっていない。

顧みれば秀樹さんは捉まえにくい風の人だっただけかもしれない。風は色もなく茫漠とし飄々としている。秀樹さんの風は今頃どの空をどこへ向かって吹いているのだろうか。

酔山様ありがとうございました 佐々木有子



吉田酔山様に初めてお会いしたのは、確か、故近藤守男様がやっていらした「栗の会」に呼んで頂いた時だったと思います。雑司ヶ谷の鬼子母神近くの割烹料理屋で、沢山のご馳走と美味しいお酒を頂きながらの夢のような連句会。ベテランの連句達者な方々に囲まれての会で、未熟者が飲み過ぎてはいけなそうと思いつつ、酔山様初め皆様の楽しい会話についていけなかったのを覚えています。酔山様は、肩に力をいれずいつも自然体。連句も、わかりやすい言葉で軽妙洒落な句を多く詠まれました。

その後「栗の会」が別の会場に移ってから、故式田恭子さんと一緒に座に和やかな雰囲気を作り出し、座が一層楽しくなったのを覚えています。また、故日高英二様が梅ヶ丘の星辰堂で開いてくださった連句勉強会でもよくご一緒しました。お忙しそうなお中でも、色々な事を教えてくださり、酔山様も様々な活動をなさっていることを知りました。徳島ご出身で阿波踊りの普及にご尽力なさっていたこと。見せてくださった阿波踊りの見

事に、皆でちよつと教えて下さいとお願ひしたら、快くお教えくださいました。我々は口ポットの様なぎこちない動きになって、大笑いしたのも良い思い出です。

そして酔山様といつて忘れてならないのは、尺八です。学生の頃からなさっていらしたそうで、何度か聴かせて頂きましたが、素晴らしい音色は素人でも聞き入るほどでした。それもその筈、尺八新戸山流の大師範でいらしたんですね。一度伺った邦楽のインタラクティブコンサートでは、奥様が司会をなさっていて、酔山さまは何も仰らなかつたけれど、素敵なご夫婦でいらしたのだと深く感じました。さらにもう一つ不思議なご縁を感じたのは、横浜に住んでいる母の従兄弟が酔山様の尺八の弟子であったこと。何年も経つてから聞いたときは、本当にびっくり致しました。

そんなご縁の深い吉田酔山様の突然の訃報を伺ったときは、とても信じられませんでした。ご入院前の六月のメールに、入院することになったとの御返事を頂き、腸閉塞の様だというお話しでしたので、十回の腸閉塞を乗り越え元気になった母のように、どうぞ元氣を取り戻してくださいと返信を差し上げ、お元氣になられるものだと思っておりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

叶うことなら、もう一度連句と酒席をご一緒したかったです。酔山様、楽しい日々をありがとうございました。

新大橋通りの座
源心「生生活転」 佐々木有子 捌

芭蕉忌や生生活転の真を知る 有子

連山遠く鶴来たる頃 転石

轆轤蹴る幽な音に聞き入りて

塾帰りにはいつもコンビニ

ウ ゆつたりと父は月へと盃を上げ

付け文さるるおくんちの夜

乱菊もかくやと思ふ愛撫なり

叶はぬ恋が醸す名曲

湖を渡りくる風心地よく

干拓事業いまだならざる

新社長昔の殿の末裔で

漢方薬の効果伝へむ

花吹雪絵馬奉納の一の宮

石段下る遠足の子ら

ナオわが祖母の握る菜飯の小さくなり

ふだん緋の前掛をつけ

週末は上司の新居へ招かれて

元カノ今やその人の妻

四の五のと言はずに俺に付いてこい

共に暮らせる狼の群

ハンニバルローマの丘を眼前に

ランボルギーニ飛ばす若者

月の舟避暑地の湾に碇泊し

対岸にある郭公の森

俊 石 良 石 有 良 石 純 石 俊 純 良 俊 同 石 良 純 俊 良 俊 子

ナウ 汝の立つ所を深く掘れと云ふ
転職好きでフリーターなる
今のこの花筵にはあの人も
窓辺の鉢にうららかな午後
純 有 俊 良

連衆 林 転石 本屋良子 近藤純子

三木俊子

深川芭蕉通りの座

源心「山川も」

松島アンス 捌

山川も草木もこぞり翁の忌

遠き国より渡り来る鶴

長者の青年棋士に隙もなし

シヨートケキをそつと一口

ウ 軒深き螢の街を月移る

もう迷はずに穴まどひ去り

秋雛のやうにあなたと添うて立つ

手話で伝へる愛の告白

駅ピアノラ・カンパネツラを弾き続け

ブルートウースは伝説の王

島育ち我ら海の子風を読み

暴走少年今は介護士

麓から咲き継ぎてゆく花の里

あちこちに湯が湧いてあたたか

ナオ 飼はれぬるイグアナの見る春の夢

ジャングルジムにひとり遊ぶ児

掬ひ取る砂が指より零れ落ち

柱時計の螺子がなくなる

味付けに醤油を効かす洋食屋

全 吉 斎 霞 全 斎 吉 智 斎 斎 ア 霞 吉 斎 智 霞 吉 文 美 子 了 斎 アンス

いつも一本飾る紅薔薇
その汗にきらきら光る月の粒
かぐや姫から貰ふTシャツ
シーバースリーガルがまだ残つてる
済んだ勝負を噛みしめてをり
流るる時間まるで純金
処女句集花の扉を押し開き
旅心つく清明の頃
智 斎 霞 吉 全 斎

ナウ 奉書紙角をきちんと重ねぬて

流るる時間まるで純金

処女句集花の扉を押し開き

旅心つく清明の頃

連衆 鈴木了斎 聖成美智子 永田吉文

高塚 霞

万年橋通りの座

源心「リズム正しき」

江津ひろみ 捌

時雨忌やリズム正しき電車音

小春日和の街を散策

筆太に丸の真ん中点打ちて

客用座布団猫すまし顔

流れ来る夜の匂ひに月昇る

浮気心を揺するコスモス

目配せに応へ抜け出す鎌祝

長押しにずらり並ぶご先祖

欲しいものウエブ注文でみな揃ひ

ナイルを眺めビクトリア湖へ

相対性理論で宇宙歪みだす

がたびし開ける自作物置

花老樹和尚の声は慈に満ちて

太公望の竿にごんずい

健 雅 心 志 心 雅 心 健 徹 心 雅 子

雅 健 雅 心 志 心 雅 心 健 徹 心 雅 子

ナオ遠足の子らの点呼は念を入れ

野面積にて堅き山城

噴煙が突如吹き出すランクA

テレビクルーはフードジャンパー

柏手を打ちて始める蹴り轆轤

温泉宿にはく有りげが

ここからは魔物となるか夢の中

白き女身の吐息ため息

月明かり葉味きかせた冷奴

ピアホールではみんな賑やか

ナウ単行本ぼつりベンチの隅にあり

けふも早起きそして体操

立ち尽くす故郷は今花の里

春挽糸の香り仄かに

連衆 武井雅子 由井 健 佐藤徹心

三つ目通りの座

源心「時雨忍や」

御園魚彦 捌

時雨忍やひと筋に野をつらぬける

丘に立ちたる大北風の中

山羊の王群を率る啼かずして

ウ 秋裕たたむ背に月あかり

自家製ハーブもてなしのお茶

地芝居の華勘平の役

高鳴るは恋の鼓動か虫の音か

ぐいと踏み込む愛のアクセル

丑の刻参りセットがセール品

全

健

心

み

志

雅

心

健

雅

志

心

雅

み

志

聞きたがり屋の子らが三人

大爆発起きて宇宙ができたとか

虫歯のうるを探る舌先

初花のひとつ解ければ癒さるる

窓際族はしやぼん玉吹く

ナオはるかなる秩父連山春霞

ミキサ一車ゆくセメントを積み

長すぎる自慢話にあくびする

新郎妊婦並ぶ祝宴

手品師の古帽子よりラブソング

凍つた湖に沈む艶文

すいすいと水尾をひつぽる鴨の列

昔語りに徳利倒して

ナウ 千社札のことはりを貼り月涼し

ドローンよりもすばしこき蠅

ラーメン店風林火山の幟立て

諏訪口のぞむまなこ炯炯

ありつたけの光のせたる花筏

うららの森に移動図書館

連衆 鈴木千恵子 堀田季何 岩崎あき子

山田美代子

源心「人も皆」

高橋夜店通りの座

人も皆散りゆくものか翁の忌

川面渡つて鐘凍つる頃

新しきCD棚の上段に

シャンソンかけるカフェに通つて

代

千

あ

千

季

あ

千

代

季

あ

千

あ

代

季

あ

季

あ

ウ 雲疾く見せて隠れて月の面

菊師仕立てるお染久松

年の差婚ひつそり向かふ秋の宿

病が癒えて仲直りする

知りません記憶にないと議員さん

八角堂に太子見る夢

父の跡継いで大工の棟梁に

外食産業浮きつ沈みつ

花前線あつと云ふ間に北上し

目借る蛙に背伸び一番

ナオ 春暖炉家族写真を並べあて

留学生の土産あれこれ

シエアハウス食事係は平等に

ねんねこ半纏今や幻

行きずりの獵師の鬚の黒々と

映画祭ではグランプリ取り

特集は宮様の恋週刊誌

嫁ぐ娘の幸祈る母

空蟬を拾ふ階段月高く

着物ほどいてサマードレスに

ナウ 百名山踏破の後はマッキンリー

屋根裏部屋に秘密基地あり

校庭をぐるりと囲む花の枝

背中を押して揺らすふらここ

連衆 根津忠史 平林香織 棚町未悠

史

眠

織

眠

史

織

史

眠

史

織

眠

史

織

眠

史

織

眠

織

史

織

史

令和四年十月二十七日
於 江東区芭蕉記念館

第百六十一回例会
芭蕉忌・明雅忌作品 源心六巻 6

清洲橋通りの座
源心「行く川の」 宇田川肇 捌

行く川の果て彩るや夕紅葉
 ビルの間に浮かぶ織月 肇
 コンコース秋装の客賑やかに 孝子
 原語で歌ふ乾杯の歌 美奈子
 地域猫恐れもなくてごろごろと 敦子
 ためらふ指をぐつと引き寄せ 鑑
 濃く甘く雪降る夜のおもてなし 孝
 水潜り抜け空へ白鳥 鑑
 督促の葉書のフォントゴシックで 敦
 靴一つで世を渡る香具師 孝
 八十路きて嘘も真もあら愉し 奈
 委員会では議論空転 鑑
 クリミヤの聖女が抱く花の夢 奈
 白衣の肩に止まる双蝶 全
 ナオうららかに休憩時間くに訛り 孝
 鼠肩チームの負けは悔しい 敦
 富士登山六根清浄一步から 全
 牧場名物氷菓完売 孝
 冷たいと言はれて豪華プレゼント 鑑
 ロクデナシでも奴は可愛い 孝
 付度とおべつかだけで出世して 鑑
 洗ふほどなほ渋き藍染 孝
 名月に偲ぶ慈愛の師の笑顔 全
 曼殊沙華咲く庭に韻声 奈

ナウ立看板入荷しました今年酒
 AIなんて何のことやら 奈
 フェラーリをトップギアで花の道 肇
 わらべの集ふ丘に初虹 奈

連衆 荒木 鑑 坂本孝子 鈴木美奈子
 武井敦子

令和四年芭蕉忌正式俳諧 俳諧連歌二十韻

百年の気色を庭の落葉哉 翁
 北窓寒き静かなる里 雅子
 教授らの集ふ議論に隙もなし 淳子
 時計の針が心配になり 遊眼
 誘ひ合ひ月の名所を巡る旅 忠史
 田毎の虫を愛の証人 健
 新妻となりて装ふ秋袷 良子
 男衆結ぶ帯のきつちり 霞
 川に沿ひここまで潮の香がのぼる 了斎
 道の駅なら直近の角 荷夕
 ナオ氷室から今着いたよとかき水 アンズ
 納涼の声静まつて月 たけを
 眠れぬ夜猿の写し絵忍ばせて 徹心
 恋の相手は剃髪の尼 ひろみ
 逢引に秘密結社の例会へ 有子
 ピラミッドには盗掘のあと 香織
 ナウ荷台牽くロバの瞳の潤みをり 千恵子
 すがるの行方追うてゆく坂 純子
 盃をまづは恩師へ花筵 緑華亭孝子
 聞こえる太鼓揚がる大風 執筆

芭蕉忌正式俳諧 令和四年秋配役

宗匠 緑華亭孝子
 脇宗匠 武井 雅子
 執筆 永田 吉文
 知司 佐藤 徹心
 座見 高塚 霞
 座配 江津ひろみ
 花司 林 転石
 香元 鈴木千恵子
 配硯 平林 香織
 全 近藤 純子
 所作指導 武井 雅子
 奏楽 鈴木 了斎



興行を終えてお役一同記念撮影

令和四年十月二十七日 於 江東区芭蕉記念館

令和四年十月十日 首尾
第十一回猫養会リモート

Zoom
11
1~3

行幸の座

二十韻「透視図法」

鈴木了齋 捌

秋澄むや透視図法と化せる街

了齋

栗名月の雨上る頃

志保子

餌さす鹿の足跡追ひかけて

房子

ホップステップジャンプする子ら

良子

アンダンテからアレグロへピアノ曲

良

ウ I T 長者一炊の夢

志

吹き荒ぶ木枯を背に受け止めて

齋

ロープ繋いで登る氷壁

良

熱爛を舐めつつ語りあふ昔

房

午前三時をとうに回つた

良

ナオ 丘越えてヒースクリフがやつて来る

齋

不意に心を騒がせる人

良

下手な接吻今日の試験は零点よ

房

白薔薇の香の後に残れる

志

月きらと散りミネソタの夏の湖

房

神学校の生徒散策

良

ナウ 草装と天金の書を取り出して

全

もてなしの膳まづは独活から

房

川幅を膨らませつつ花筏

良

挨拶交はす声ののどらか

執筆

連衆 北龍志保子 室 房子 本屋良子

真木柱の座

二十韻「新走」

大島洋子 捌

新走日々のカオスがあてとなり

洋子

栗名月の伴は愛犬

徹心

八千草を手に手に抱へ帰るらん

あき子

小学唱歌声を揃へて

暁巳

ウ 横丁を自転車漕いで豆腐売り

心

看板娘化粧濃い目に

あ

名古屋では持てないほどの引出物

洋

サービス上々サガワクロネコ

巳

打水は朝昼夕と三度撒く

心

縁台将棋たけなほとなり

巳

ナオ 防災の補給点検忘れずに

あ

富士の樹海は天然の堰堤

心

清張の恋は必ず破綻する

巳

悪い奴ほど美女が取り巻き

あ

凍月の禰宜の柏手裂く空気

全

四つ切りの古紙包む焼芋

巳

ナウ 闘志秘めブレイクダンスパリめざし

あ

シテイ生まれの若い蜜蜂

心

名苑の名木今ぞ花万朵

巳

春光で撮る会心の作

執筆

連衆 佐藤徹心 岩崎あき子 島村暁巳

梅枝の座

二十韻「秋のかたまり」

鈴木千恵子 捌

銀輪や秋のかたまり分けてゆく

千恵子

金木屋に淡き月影

薫

新走今年の出来は上々に

敏枝

キッチンバサミ何にでもよき

千

ウ 工芸家百円シヨップお気に入り

薫

犬を介して芽生えたる愛

枝

抱かれる聖母のやうな君の手に

千

回文めいた俊太郎の詩

薫

海亀に乗りもぐりたい青い海

枝

囓りつつゆく胡瓜一本

千

ナオ 国境のなき医師団は決意秘め

薫

つけっぱなしのラジオうつつろに

枝

仮初の女遊びと割り切つて

千

偽名を記す粉雪の宿

薫

満月に黒川能の面躍如

枝

山の時に鴉眠れる

千

ナウ 羽箆を作りつづけて古希迎へ

薫

遠路来た友路味噌を召せ

枝

樹木医が耳当てて聞く花の声

千

かげろふ揺れるまほろばの里

枝

連衆 近藤薫 箭内敏枝

文部科学大臣賞

二十韻「大試験」

杉本聰 捌

大試験終へて少女の顔となる 恭子
 たんぼぼの絮飛ばす道端 美友紀
 潮干狩りバケツそれぞれ手に提げて 眞智子
 母が伝授の結び三角 朋子
 凍雲を従へ月の皓皓と 泰子
 暖炉にくべる過去のいきさつ 眞智子
 類染めて交換ノート読みし頃 泰子
 騙し絵ばかり揃ふギャラリ 眞智子
 眞実を知らせない国知らぬ民 恭子
 蒟蒻問答八つあんの勝ち 城子
 ナオ 泡盛を切子の杯で酌み交はし 朋子
 赤い琉金尾びれゆらゆら 美友紀
 深窓の蒲柳のひとに見初められ 眞智子
 あさがほ愛でる後朝の庭 恭子
 有明に仕草へうきん賽の神 全
 草鞋の紐に蝨斯鳴く 城子
 ナウ 逆転のゴール沸き立つスタジアム 美友紀
 留学先はマドリドとか 城子
 揺蕩ひてやがてせはしき花筏 聰
 逃げ水追ひて自転車を駆る 朋子
 連衆 宇野恭子 奥野美友紀 北野眞知子
 大島朋子 沖田泰子 川井城子
 令和四年三月十一日起首 同四月十日満尾
 於 南砺市井波社会福祉センター

南城市長賞

二十韻「余生なら」

橋本枯野 捌

余生なら深くあれ祇王の忌 枯野
 瑞々蒼き雪間草の香 ひろ子
 若駒は牧場の柵を跳び越えて 枯野
 通販で買ふ切り株の椅子 ひろ子
 シャンパーニユ黄昏月を透かし見る 枯野
 水蜜桃の玻璃につるりと ひろ子
 肌寒のそれでも二人デイスタンス 枯野
 君の鼓動を指先に聴き ひろ子
 戦争は隣の国で起きてゐる 枯野
 直下の崖に迫る南風波 ひろ子
 ナオ 白服の少年とうに変声期 全
 巖つき舎監腰に鍵束 枯野
 秘め通す錠破りの恋なれば ひろ子
 再会といふ罪深き夢 枯野
 月明りその先にある狸毘 ひろ子
 知るも知らぬも味噌玉の出来 枯野
 ナウ 草野球ベンチ沸かせる珍プレー ひろ子
 礼拝告げてカリヨンの鳴る 枯野
 乳母車降り敷く花のただ中を ひろ子
 庭の巣箱はお気に召したか 枯野
 連衆 白崎ひろ子
 令和四年三月十二日起首 同二十八日満尾
 文音

南城市教育委員会教育長賞

二十韻「角を曲がれば」

瀧村小奈生 捌

沈丁や角を曲がれば夜となり 小奈生
 朧の月の照らす静寂 葵
 やどかりはごそりごそりとリビングに 生
 パスワードにて開けるパソコン 葵
 腹斜筋腸腰筋と鍛へあげ 生
 海開まであと二日なり 葵
 ソーダ水の向かふにきみがある景色 生
 幸せですか愛ほしき人 葵
 下着にも靴にも書いてある氏名 生
 亡き母想ひ迎鐘つく 葵
 ナオ レコードに針落とすとき月さやか 生
 葉裏に眠る秋のでふてふ 葵
 ちびつこの探検隊の勇ましく 全
 蔵で見つけた江戸の笑ひ絵 生
 雪達磨あれと転げ裾乱れ 葵
 くちづけませうくしやみ引つ込め 生
 ナウ ジョーク入れ和顔施を説く寂聴尼 葵
 うまい酒なら百薬の長 生
 せせらぎを心のままに花筏 葵
 声立てさうに山は笑つて 執筆
 連衆 石川葵
 令和四年三月八日起首 同二十七日満尾
 文音

一般社団法人日本連句協会会長奨励賞
二十韻「初蝶舞」 根津忠史 捌

初蝶や平和を祈る人の波 雅
 黄水仙咲く里の道筋 みつ代
 床の間に春一文字の軸掛けて ちえこ
 ポット取り出し到来のお茶 忠史
 月涼しモデル歩きで孫膝に 礼子
 そつと行水覗き込む奴 雅
 合婚へ三十路四十路もご盛況 みつ代
 かぐやの望み悩む公達 ちえこ
 心身を浄め早立ち御師の家 忠史
 深山生活漁師目指して 礼子
 ナオ 悪友と汗に仕込んだ笑い草 雅
 菊人形が踊りだす夢 みつ代
 国宝の城のまぶしき後の月 ちえこ
 オープンカーに抱き合う影 忠史
 株主の御曹司とてねらい打ち 礼子
 歳末寄付はいつも匿名 雅
 ナウ 除夜の鐘長蛇の列をさばく僧 みつ代
 ふかし饅頭並ぶ店先 ちえこ
 写メールの異国の花も満開に 忠史
 園児元気にシャボン玉追う 礼子

連衆 海老原雅 今井みつ代 増井ちえこ
 近藤礼子
 令和四年三月十五日起首 同二十四日満尾
 文音

ジュニアの部

文部科学大臣賞

三つ物「かぜのしっぽ」 鈴木千恵子 捌

はるのかぜかぜのしっぽはどこにある 植田泰就
 にげられちゃったおたまじゃくしに 植田結衣
 赤ちゃんの目が光つてるときかわいい 結衣

令和四年三月二十九日首尾 リモート

国民文化祭実行委員会会長賞

表合せ六句「はるのにじ」 鈴木千恵子 捌

はるのにじずつとみてたらきえてった 植田結衣
 カメラでパチリうぐいすの声 山内咲良
 イースターエッグレースをおとうとど 衣
 ぐらぐらゆれる高い吊り橋 良
 手どりがわおくせんまんの花火さく 衣
 こおりいちごをもつとたべたい 良

令和四年四月五日首尾 リモート

沖縄県知事賞

表合せ六句「花びらは」 宮川尚子 捌

花びらは今校門を通過中 岩原凜弥
 四月七日のクラス発表表 鈴木琥珀
 いもうとのクレヨンぼくのポケットに 弥
 えいと押すまで迷う自販機 丸山花純
 かなぶんがおでこめがけて飛んでくる 珀
 おしゃべりずっと続く公園 純

令和四年三月二十六日首尾
於 B S T学院

沖縄県議会議長賞

表合せ六句「合図なく」 宮川尚子 捌

始まりは合図なく来る受験生 岩原凜弥
 春の夢へともぐりこみたい 丸山花純
 バンジーにさんにいちとトライして 鈴木琥珀
 僕の顔見て笑いころげる 弥
 恋バナの続き聞きたい月の下 純
 いっしょに眠る猫とこおろぎ 珀

令和四年三月二十六日首尾
於 B S T学院

南城市教育委員会教育長賞

三つ物「にゆうがくしき」 鈴木千恵子 捌

もんしんちようにゆうがくしきにとんできた 植田結衣

ピカチュウたちと花をまつてる 全

フェルトのブローチだれにあげようか 山内咲良

令和四年三月二十九日首尾 リモート

子どもが連句に出会うとき

植田円水（陽子）

千恵子さま、この度の受賞、誠にめでとう
ございます。また、親友の山内裕子さんと我が
家の姉弟達が連衆となつて巻いた作品が、栄え
ある賞を戴いたことに感謝いたします。

私たち親子と連句との出会いは、コロナ禍に
より始まったリモート連句会でした。書齋で四
苦八苦する私の隣で、子ども達の考えた拙い付
句をお揃きさまが面白いと採って下さったこと
や、連衆の方々が可愛がって下さったことが嬉
しかったです。自然と親子で参加するようにな
りました。そんなある日、千恵子さまからジュ
ニア連句のお誘いを頂き、裕子さん親子にも声
を掛けて、東京・鹿児島・石川をオンラインで
繋ぎ巻いた作品が『かぜのしつぽ』他三巻です。
また、千恵子さまに背中を押され、母親同士が
それぞれ捌きとなり、巻いた作品も賞を戴くこ

美ら島おきなわ文化祭2022

南城市実行委員会会長賞

三つ物「うちのねこ」 鈴木千恵子 捌

うちのねこねこのこいかするのかな 植田結衣

ばあばのおにわレンギョウウひらら 全

よもぎもちコネコネこねた白のなか 山内咲良

令和四年三月二日起首 同二十九日満尾

リモート

とができました。

国文祭で初めて参加したリアル実作会では、
田舎育ちの子ども達がいかに自由奔放であるか
ということの再認識と、それを上手くすくい上
げていく千恵子さまの鮮やかな捌きに敬服いた
しました。子どもと連句をしていると、身体で
感じたことに言葉に乗せ、それらが連なつてメ
ロディーがうまれるような感覚を抱きます。前
城先生（琉球大学）の講演で、琉歌の優劣を競つ
た際に「肝心思ひわつらひて目を閉つ、謝敷源
河のふた節を吟してこれを糸竹に問へは手なり
し歌の紅の答へには右の方に引きる、響きあり
てなん聞ゆなり（明治四三年一月九日付『琉球
新報』）」というお話を聞き、どこか通じるも
のがあるような気がしました。

子どもがもつ南京玉のような言葉たち、その

一般社団法人日本連句協会会長賞

表合せ六句「鳥になる」 平林香織 捌

ぶらんこにのるとわたしは鳥になる 村上咲耶

初花笑う校庭の隅 村上麟太郎

休日の父は猫の子捕獲して 村上鉄太郎

乗ってみたいな夢の白バイ 麟

たくさんの庭のトマトがすぐに消え 鉄

いちにのさんで跳んだ大縄 耶

令和四年三月十二日首尾 リモート

一般社団法人日本連句協会会長奨励賞

三つ物「シャーベット」 植田陽子 捌

シャーベットあたまキンキンはがとける 植田結衣

吹上浜でパパと飛び込み 山内咲良

銀色のかみひこうきをのせる風 衣

令和四年四月十六日首尾 リモート

連なりが、私たちを小さな一室から沖繩へと運
んできてくれました。それは子ども達のおかけ
であり、また連句を通して出会った人々のおか
げです。これから子ども達とともに歩む道にと
んな出会いがあるのか、楽しみます。

夏の鶴岡にて 内田遊眠



黒いマリア像

誰にでもずっと心に深く刻まれた原風景があるだろう。私の場合は母の郷里酒田、父祖の地鶴岡がそれである。

猫蓑会のお仲間で山形地方に縁がある方とは季節の食べ物や方言を懐かしく語り合っていた。ある時、平林香織さんが研究調査で酒田鶴岡に足繁く通いシンポジウムもなさっていたと聞き、是非ご一緒したく願っていたところ、七月に鶴岡致道博物館の土曜講座で講演、と所属する博物館友の会報で知り、早速受講申込をして、平林さんに同行が叶った。鶴岡は徳川四天王筆頭、酒井忠次を祖とした十四万石の城下町で、今は十八代目酒井忠久公が藩校だった致道館の館長で、「おらほの殿さん」と馴れ親しまれておられる。今年令



鶴岡致道博物館

和四年は、酒井家が庄内に入部してから四百年になる。それを記念して様々なイベントがあり、平林さんの土曜講座もその一環をなすものだった。この度の「酒井忠徳と点取俳諧」では、九代目忠徳公が、松代藩主真田幸弘公、熊本藩主細川重賢公、府内藩主松平近衛公らと江戸城の詰めの間や江戸藩邸等で俳諧を愉しんでいたという興味深い話もうかがえた。

この日の夜に鈴木千恵子さんをお迎えし、翌日再度致道館を訪れた際に、前日の受講者で東京在住の女性と再会し、連句に興味があるとの事で連句会のPRも出来た。

鶴岡カトリック教会では珍しい黒いマリア像、藤沢周平記念館では氏の生い立ちに触れ、加茂水族館では幻想的なクラゲの輪舞を夢心地で眺めた。宿泊した湯田川温泉では、漆黒の闇の中で蛍狩りも体験した。あの折に『酒恋連句』でもやっておけばよかったか……。

翌日訪問した酒田の本間美術館では、折しも芭蕉来訪時に当地で詠んだ発句掲載の懐紙等々にも出会え、幸運だった。

今回の記念にと殿様に発句を所望し、賜った句で表合せ「蝉しぐれ」を巻いた。

城蹟にものふ偲ぶ蝉しぐれ	酒井忠久
絵蠟燭売る店の打ち水	平林香織
拾はれた子は美しく生ひ立ちて	鈴木千恵子
「刀剣乱舞」集ふコスプレ	内田遊眠
月の窓愛の言葉のレトリック	織

燐寸を擦れば霧に君見ゆ
一献の酒選びゐる菊脛
神の島には謎の生物
花のそらNASAスタップの仰ぎたる
いつまでも漕ぐぶらんこの舟

千 眠
織 眠
千 眠

発句は、ご先祖を偲びつつ、名作『蝉しぐれ』も踏まえた秀句と共感、脇に香織さんが鶴岡名産の絵蠟燭を詠み、第三は千恵子さんが嫺やかに場面を展開した。出発前の多忙な三日間で満尾出来たことを改めて感謝したい。

ご講演によれば、普段は到底お目通り叶わない下級藩士も、連句の座では俳号で肩を並べたという。下級藩士の末裔が、恐れながらも殿様に発句を強請り一座するなど不屈きこの上ないことだろうが、これも故郷を愛する故とお許し頂きこの一巻を致道館にお納めさせて頂き、様々の偶然と出会いの嬉しい旅を終えた。



酒田市庄内川ベリの上居倉庫にて

●既往の行事

・令和四年十月二十七日(木)に、第百六十一回猫蓑会例会(芭蕉忌・明雅忌)を江東区芭蕉記念館にて開催。正式俳諧を興行の後、源心を興行。

●今後の行事予定

・令和五年一月二十二日(日)に、第百六十二回猫蓑会例会(令和五年初懐紙)をアルカディア市ヶ谷にて開催予定。青木秀樹前会長追悼の歌仙を興行します。

・令和五年四月下旬に、第百六十三回猫蓑会例会(亀戸天神社藤祭)を開催予定。神楽殿にて正式俳諧興行の後、二十韻を興行。

●猫蓑会リモート

・十月十日(月)に開催された第十一回の作品は今号に掲載。十二月十日(土)に開催された第十二回の作品は次号に掲載予定です。

・「猫蓑会リモート」は原則として偶数月第二土曜日の午後一時から開催しますが、臨時に日程を変更することがあります。猫蓑会公式サイトなどでご確認ください。

●リモート連句講習会を開催します

・ご希望があれば奇数月第二土曜日午後に「猫蓑会リモート室」にてリモート連句講習会を開催します。筆記係やホストを務めるために必要な事柄も。

ご希望の方は、平林香織《Khira834@gmail.com》宛にメールでお申し込み下さい。その他の「猫蓑会リモート室」使用申し込みも平林まで。

●会員の受賞

・国民文化祭おきなわ2022連句大会

〈一般の部〉

文部科学大臣賞

二十韻「大試験」

南城市長賞

二十韻「余生なら」

南城市教育委員会教育長賞

二十韻「角を曲がれば」

一般社団法人日本連句協会会長奨励賞

二十韻「初蝶舞」

〈ジュニアの部〉

文部科学大臣賞

三つ物「かぜのしっぽ」

国民文化祭実行委員会会長賞

表合せ六句「はるのにじ」

沖縄県知事賞

表合せ六句「花びらは」

沖縄県議会議長賞

表合せ六句「合図なく」

南城市教育委員会教育長賞

三つ物「ゆうがくしき」

美ら海おきなわ文化祭2022

三つ物「うちのねこ」

一般社団法人日本連句協会会長賞

表合せ六句「鳥になる」

一般社団法人日本連句協会会長奨励賞

三つ物「シャープベット」

以上の作品を今号に掲載しています。

棚 杉本聰

棚 橋本枯野

棚 瀧村小奈生

棚 根津忠史

棚 鈴木千恵子

棚 鈴木千恵子

棚 宮川尚子

棚 宮川尚子

棚 鈴木千恵子

棚 鈴木千恵子

棚 鈴木千恵子

棚 平林香織

棚 植田陽子

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・室 房子様 令和四年十一月 一万円

・関口恵美子様 令和四年十二月 一万円

・基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●新会員

・古和田雲呑 (東京都) 令和四年十月入会

・川野晴兔 (大阪府) 令和四年十一月入会

・室 房子 (USA) 令和四年十二月入会

・松井柊木 (奈良県) 令和四年十二月入会

・中谷千恵 (石川県) 令和四年十二月入会

●会員の訃報

・会員の杉本聰様が、令和四年十一月三日に永眠されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

●猫蓑作品集第二十六号作品募集中

・引き続き会員の出稿を募集中。二末日締切、送付先は平林香織です。

季刊 『猫蓑通信』 第百十九号

令和五年一月十五日発行

発行人 猫蓑会 鈴木千恵子

事務局 佐々木有子

〒161・0033

東京都新宿区下落合4・9・34・313

編集人 鈴木了斎

編集委員 奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・

武井雅子・平林香織・御園魚彦

(五十音順)

印刷所 印刷クリエート株式会社